

A



deceive

意味のない言葉ばかり並べて
それだけで尊敬を集めている

騙す方も騙すほうだけど
尊敬する方も尊敬する方

何か訳が分からないというだけで
賞讃する事は 一番愚かで
こっけいなこと

一番大切な心を 感動を
度外視した評価なんて所詮
風の前塵（ちり）

いいものが埋もれ
悪いものが蔓延（はびこ）る矛盾に
一番影響を与えているのは
名もなき僕たち以外にいない

一番力がないと思われ
思っているものが
一番強い事は
子供の頃から聞いている童話や
「みにくいあひるの子」でも
語られていたはずでしょう

ぶつかってくるような芸術を
燃え立つような芸術を
君には愛していて欲しい

今は生ぬるくて気持ちの悪いものも
蔓延（はびこ）っているけど
決してそれだけじゃない

周りが暗いほど
光は目立って見えるから
その宝石を君の手で掘り出して
僕に見せてよ

今度会った時にでも
心から楽しみにしているからね
約束だよ

Hoarse

あなたの悔しさは
かすれた声のようにあふれていた

誰も近寄れないようなその覇気の側
ただ問いたかった

ねえ 僕に何ができるの？と

力になれるかなれないかなんて
問題じゃなかった
ただ問うていた
僕に一体何か手伝える力はあるのですか、と

全身で叫んでいた
何か自分にできる事はないかという
思いだけで叫んでいた
涙してしまうくらいに心が打ち震えていた

何かをしたい 力になりたいと
そう思える心には
無力という言葉は自然に消える
あきらめという言葉は消える

手を伸ばす先には
頷いてくれるあなたの姿
何もできなくていい
だから 永遠にあなたの味方で
いさせてくださいと
側に置いて下さいと
その思いだけが心を占領した

それ以外何もなくなっていた

純粹なものだけに満たされた心は
透き通るように澄みきっていた
いつかこの澄んだ思いが
君の両手ですくわれて
喉を潤す日が来る予感が口を拭う
そんな時に限って
水面はゆれていて
君自身の表情を見せてはくれない

残念だ

Wail

壁に拳を打ちつけ慟哭した日から
僕の意志は変わっていない
共に持った夢を叶える
それだけだった

笑われ続けた響きは
地球の裏側へ届くほどの数だっただろう
でもそのバカにしたような笑いは
「時」という厳しき審判の元に
塵と消え去ったよ
もう彼らは笑う事はおろか
生きてさえいない

今も称賛できずにいる声が
あまたに散らばっているけど
行く末は同じようなものだろう

凍りついた笑顔は
衝撃を受けた氷のように
砕け散っていった

たった一人の人間の心にも
悲惨という文字が浮かぶのなら
喜んで君のためだけに
旅に出よう

僕は元からそういう風にできている
組み変える事さえかなわないんだ

君の泣き顔がなくなるまで

戦い続けるから 側にいるから
僕は本気さ 言葉なんていら
ない
君の視線でがんじがらめに
して
捉えてくれていればそれで
いい

その厳しい視線が僕にと
って
最大の証明であり最大の
感謝

What scare?

何が怖い

間違いが広まってしまう事が怖い

何が怖い

知らずのうちに悪の音が

この世にはびこってしまう事が怖い

何を見ていられない

自分だけでなく自分の大切な人達が

その音に染まっていく事を見ていられない

何を見ていられない

小人物を大人物と勘違いしたまま

気づかない姿を見ていられない

吐き気がする

気のいい人たちを餌食にする姿に吐き気がする

吐き気がする

罪を罪と感じられないその濁った心に吐き気がする

冗談じゃない

こんなものをはびこらせたまま放っておくなんて

冗談じゃない

あのままへらへら笑わせたままにするなんて

冗談じゃない 変革する

今までとは違う暴力とも違う

血を流す事とも違う方法で変革する

変革する

君の笑い声で

笑顔で

夢で

希望で
光で
正義で

変革する

suppress

抑えきれないほどの怒りを
一体 人は普段どうしているのだろう？

そもそもここまで純粋な思いを
長期間抱えていられる事の方が
めずらしいものなのだろうか

怒りという感情を忘れ去ったかのように
ぬるくなった人達の思う術など
知る由もないけれど

純粋な どこまでも純粋な心の炎に
水をかける事ばかり教えているけど
それを嘆くだけじゃ何も始まらない

燃え上がるたび水をぶっかけられて
しらけてしまっている時間などない
そんなに弱い思いだったの？

本当に宿した炎なら
そのぶっかけられた水さえ
焼きつくしてしまえばいい
ただ それで済む話

思う存分喚（わめ）き散らして
誰かのせいにしてしまった後には
どっしり構えて自分というものに
全てを賭けてみればいい

君には君自身全てを託せる
それだけの価値がある

ほら 負ける気がしなくなってきた

Trivial

いつのまにか大きく息をする事さえ
忘れかけていた

青く澄んだ海に白い雲もいいけど
今すぐには手に入れない景色だから
とりあえずスーハー息をした

素晴らしい景色なんてなくたって
僕らはこの場で幸せになれる
そんな気がしないだけなのさ

思うようにいかない事が
3つ4つすぐに浮かぶような日常にも
きらきらした瞬間はある

僕の場合 さりげなく感謝されたり
普段挨拶できてない人と挨拶できたり
思いがけず美味しいものが食べれたり
そんなことだけど

小さな幸せが大きな幸せだと
そう考えているんだ

人が些細だと笑う事も
僕にとっては大切な宝物
いいかげんどこかに
幸せになれる場所があるだなんてやめてよ

僕ら心を持つ人間

心はどこでだって幸せ創れるすぐれもの
ただ僕らは心をなくした事も
心と離ればなれになった事もないから
気づかないだけ

ここで幸せになれるんだ なるんだと
気づかないだけ

今ここで立っていられてる 堂々と
ここまで来るための逡巡した距離といえ
地球何周分と言えれば充分？
分からない

正直 選んだはずのものを
悔いた事もあった
一瞬にも満たない時間が経つ間だけ
だから僕の中ではなかったことにした
こうして自分を綴る事のなんて幸せ

これさえあれば
僕は生きていけるさ
言葉は僕にとって彼方の光であり
となりの君

詩よ 力を取り戻せと
今日も働きかけては
息をしているか耳を近づけるような日々

それでも僕は
詩というものを蘇らせよう
現代に 最後の一人にたとえなっても
ここに立ち続けようと

そんな思いを 誰にも明かす事なく
胸に秘めながら

Return

君から眼をそむけないよ
そんな事を言ってみても
怯えさせてしまうだけなのかな

人は誰かに見ていて欲しいと思う反面
実際に全てを見透かされると
恐れてしまう面がある

心は微妙だ
言葉どおりに動けば
正解ってわけでもない事も多く
でもそれが真実だったり

そうして眼前の人の心の現実にぶつかった時
人の心に寄り添うことが難しいと
思ってしまうかもしれないね

けれどね 案外難しいものでもないんだ
真心は必ず伝わる
伝わっていないように見えても
それはいつか必ず花開く

無駄だったのかもしれないなんて泣かないで
君のそそいだ真心は
その人からじゃないかもしれないけれど
他の誰かから必ず君に全部帰ってくるよ

信じて
無駄な事なんて一つもない
失ったもの以上のものを取り返す約束を

君は未来と交わしているから
君の覚えのない頃に

Fueling station

記憶は燃料のようなもの
捨てないままでも
嫌な記憶を燃やしていけば
未来にたどりつく為の糧となる

もちろん「たどりつく」と言っても
ゴールなど存在しないよ
ゴールとスタートの繰り返しは人生だから

でもね 思い望むものと出会う事が
「たどりつく」ことなら
君はその先を望むから
それを思い望んだということ

君の悲しみは本当は
そんな手前のもののためじゃないこと
分かってる

でも 現実を歩いてゆくために
手前のものを欲しがったことも分かってる

だから
その一歩も
その先の一歩も
手に入れられるという事を君に伝えたい

それだけなんだ

捨てずに焼いて

たどりついてよ

Focus

これからどんな未来が待っているんだろう
ぼんやりとしたピントを合わせられないままでも
不思議と不安はない

これを僕は希望と呼ぼう

この世からあきらめという言葉が消える事を
悲惨という言葉が消える事を
疑わない

うらやましげに他の誰かを見つめる君に
それ以上のものがあることを
僕は知っている

それは席を譲ったり 笑みを向けたり
朝早く起きる事よりも
ずっと素晴らしいこと
もちろんそれらも充分素晴らしいのだけれど

だって 君は今日も生きている
生きているという事が
それだけでどれだけ美しいかなんて
今更きき飽きた頃だろうけど
あえてもう一度言おう
「生きている事は奇跡だ」

悲しいけれど
忙しい毎日に甘えているうちに
僕らはすっかりこの事を忘れてしまうね

欲しいもののために
願望を叶えるために
生きているという事を捨て去ることは愚かだ

何かがないと
何かできないと
何か持ってないと
生きられないなんて間違いだ

生きている事に意味があるんだ
生きているから手に入れられるんだ
生きているから
生きているから……

今まで生きているのは
この時代で何かを成すためだという事を
思いだせばいい

あきらめという言葉が消すために
生まれてきたという事を
悲惨という言葉が消すために
生まれてきたという事を
思い出せばいい

その胸に聞いてみればいい
生まれてきたという事実に思いを巡らす
その意味なんてとっくに分かってる

生まれてこなければよかった人間なんて
一人もいない
必要のない人間なんて一人もいない
うつむいたまま
泣いたままでいい人間なんて
一人もいない

appearance

頭で割り切れない事を
割り切れる方法は
信じる事だけ
何も信じない人も所詮
何も信じない事自体を
信じているんだから同じこと

今になって僕は気づいたんだ
今まで恐れているフリをしていたと

追憶や過去に浸っている事が
心地よすぎて 長く居すぎていたんだ
本当は追憶も過去も思い出も
怖くなどないのに

弱いフリにもうそろそろ疲れたみたい
強いという事は
他とズレるような気がして
面倒になりすぎていた
もうその必要はないらしい

誰が見ていようといまいと
思う存分に憤り
悔しさに打ち震えながら
生きていけばいい

心がはしゃぐその号令に
再会した途端に心は軽くなり
この怒りが距離を生む事さえ
楽しんでいけると確信した

自分の誕生した本源に
ぶつかった僕の周りには今
うつむく人には光に見え
傲慢な人間には
怯えの対象にしかない炎が宿り
行き先を照らす

未来を見据えて

assistance

悔しくて当たり前だと思った
まだ僕はいくらかも進んではない
否 まだ幕が開いてもいないのかもしれない

打ち震えたあの日の覚悟に
見合う何かに出会うまで
先に進み続けなきゃならない
過去の記憶に
左右されているように思っても
それは大きな勘違い

ちゃんと君は
君の足でほら 歩いているよ
何も心配など必要はない
がんじがらめに思える心も
君が思う以上に自由なんだよ

そう言ったら君は
戸惑いがちに笑うかな

そんな笑顔が見られるだけで僕は
今日という一日は
そのためにあったと思っている
もちろん 口には出さないけれど

手を差し伸べて 差し伸べられて
こうやって僕ら進んでいくんだね
支えになっていない人間なんて
一人もいない
支えてもらっていない人間も

一人もいない

一人の人間の力は
一人の人間が思うよりずっと強くて無限大
倒れそうになるまで駆け抜ける君の姿が
それを物語る

理屈も卑屈も必要ない
ただ不屈であればいい
それが無限大
難しい事はひとつもない

affront

自分の事を侮辱されるより
大切な 一番大切な人が
侮辱される事の方がよっぽど辛い

自分の受けた苦しみは耐えられるのに
大切な人がいじめられていると
怒りで我を忘れそうになるから
とたんに怖くなる

まだ僕が生まれる前の話
それは過去であって過去じゃない

とっさに感情に手を出さずにいることが
あんなにも難しいこと
知ったのはあの時が初めてだった
それは経験した人じゃないと
分からないだろう

いつもそう
僕はそんな場面に出会うたび
所を去り 去らざるを得なくなる

でも一度だってその選択に
後悔なんてなかった

何かを守るために
自分を犠牲にすることは
犠牲どころか心を蘇生させる術だから

たった一つの術だから

あの時感じた怒りや痛みは
今になって光を放ち始めている
あの頃こんな変化を
誰が予測できていただろうか

antagonism

大人になるという事は
夢が叶わないものだと知る事だと
言い切るなら
僕は真っ向から対立してみせよう

大人になるということは
夢は叶うという事を知り過ぎること

みんな夢破れているよと
君は勝ち誇ったように言うかもしれない
僕が言える事はただ
僕の見つめてきた「みんな」は
夢を叶えているということ

人はそれぞれの世界でしか
物が言えないものだから
仕方がないけれど
夢が叶わない現実と
夢が叶っている現実を
ぶつけてみたところで意味はない

ただ「それが現実だ」っていう言葉は
どうにでも捉えられるってこと

知っている現実なんて
一握りでしかないくせに
偉そうな口たたかないで

見えていない景色があると知っている事は
その知らない景色を知っているも同じこと

一番タチが悪いのは
少ししか知らないのに
全て知っていると嘯（うそぶ）き
謙虚さを失うこと
現実を語る資格は
どちらの方が持っているだろう？

多くの時間が重なる頃
何が原因かさえ分からなくなる錯乱に
嵌（は）まる前にできる事と言え
そういう人の場合 黙る事くらいだろうか
その足は空回りする回し車の上にある

alteration

綺麗ごとと一番近い奴という
扱いかもしれない私は
現実志向も引くほど現実を見つめている

あれだけ辛い目にあわせておいて
なお満面の笑みを浮かべているのを見ると
蹴ってやりたくなる
ここだけの話

暴力が嫌いな私でさえ
そんな事は山ほどある
一人ずつ歴代のやな奴を並べて
張り倒してみたいと思った事も
一度や二度じゃない

そんな気分になる事が
君にもあるのかな
なぜだか
親しみをもって頷いてくれる君の姿が
目に浮かんだから
それだけですべてもういい気がした

許せないという現実と
一人ではないという理想
どちらも持ち合わせたまま
そのままの僕で歩くから
君もそのまま歩いていてよ

いつも頭に浮かぶのは
許せない奴の顔
だけどそのおかげで

歩けている気もして

その答えが出るのは
もう少し先にはなりそうだけど

もし君の方が先にその答えを見つけたなら
そっと僕に耳打ちしてよ

……こんな風に失ったものもあるけど
手に入れたものもあること感じてはただ
拳（こぶし）を握りしめていた

account

泣いたことがないと涙の味は分からない

涙が枯れたことがないと

涙することができる幸福は分からない

孤独を知らないと

誰かと話せる幸せが分からない

孤独の闇を知らないと

本当に分かり合えるということの

難しさは感じられない

うつむいて歩いた事がないと

道端に咲くタンポポを見つけられない

ひとりぼっちになってみないと

君の大切さは分からない

傷ついたことがないと

人の優しさには

上辺と本物がある事に気付かない

心の傷が癒えない思いを知っていないと

あなたの言葉は

僕に届かないままだったかもしれない

病気がちだから

健康の大切さを知ることができ

苦しんでいたから誰かの苦しみに目をやり
耳を傾けたりできたりする

お金があるとお金の苦勞は分からない

痛い思いをしていないと
痛みなんて分からない

悲しみにくれたこともないまま
悲しみが分かるはずもない

絶望に覆われた事もなくて
その景色が語れるはずはない

僕らはこの全てを理屈じゃなく
体で分かることができるから強いんだ

だから強い

誰にも負けない

abandoned

僕の気持ちは分からないと
誰にも 誰ひとりにも分かるわけがないと
慟哭した日が幾日もあったね

君も僕も

だけど 現実を生きたいと思うなら
一人になってはいけない事を感じ
次はその痛みに泣いた

でもその涙もここに置き去りにしていこうか

僕らはあの日より
ずっと強くなった

踏みとどまるしかない
何かを変えたいのなら

少なくとも孤独に負ける結末なんて
選びたくはないだろう？

それじゃ いくら言い訳しても
敗北でしかない

うんざりしたなら 立ち上がれ

自分自身の両の手だけを使って

もう一度立ち上がるんだ